

結婚子育てイメージ尺度の作成と未婚者の特徴 —利得損失としての結婚子育てイメージ尺度の作成と妥当性の検討—

永久 ひさ子*

利得損失としての結婚子育てイメージ尺度を作成し、一般的結婚態度尺度との関連から妥当性を検討した。また、結婚子育てイメージ尺度について、未婚者と未婚時点の既婚者の違いを検討した。25歳から39歳の未婚者と既婚者960名を対象にWeb調査を行った。子どもに関する項目を追加した結婚子育てイメージ尺度項目は、前研究と同じく、幸せな生活イメージと、自由の制約大変さイメージに分類された。一般的結婚観との相関は、幸せな生活イメージは積極的な結婚態度と関連し、自由の制約大変さイメージは消極的な結婚態度と関連していた。未婚時点での既婚者は、幸せな生活イメージと自由の制約大変さイメージの平均値が同程度であったのに対し、未婚者は幸せな生活イメージよりも自由の制約大変さイメージの方が有意に高いことが明らかになった。この結果から今日の25歳から39歳の未婚者においては、結婚子育ての幸せなイメージが低く自由の制約や大変さイメージが高いために、結婚の動機づけが低いことが示唆された。

Key words : 結婚と子育てイメージ, 未婚化, 接近回避志向, 利得イメージ, 損失イメージ

1. 問題と目的

1.1. 少子化の要因

我が国では近年、家族の変動が著しい。未婚化は先進国に共通の傾向であるものの、日本をはじめ東アジアでは非嫡出子が欧米に比べ極端に少ないことから、未婚化は少子化の主要な要因とされている(内閣府, 2004)。少子化の主な要因が、未婚割合の増加と既婚女性あたり出生率のどちらであるかの分析からも、少子化の主な要因が未婚化にあることが示されている(ニッセイ基礎研究所, 2023)。また、事実婚や同棲が結婚に代わる関係性として増加している欧米と異なり、日本では結婚以外の関係性の著しい増加は見られない(第16回出生動向基本調査)。つまり日本における未婚

化は、結婚の減少だけでなく、家族形成そのものの減少と言える。

長らく日本には結婚して子どもを持つのが当たり前、という、結婚、子ども規範があった。そのため、これまでは結婚にどのようなイメージを持つかは関係なく、ほとんどの人が結婚して家族を形成していた。しかし結婚や子どもに関する社会的圧力がなくなり、個人の生き方の選択肢となった今日では、結婚生活や子育てが、自分にとって幸せなのか、そうでないのかというイメージが、結婚や家族形成の意欲を左右しているのではないだろうか。

未婚化の要因として、若者の経済的問題に焦点が当てられることが多いが、第16回出生動向基本調査(国立社会保障・人口問題研究所, 2022)に

* 人間学部心理学科

よれば、未婚理由では適当な相手と巡り合わない、必要性を感じないなどが主要な理由であり、経済的理由は少ない。また独身生活の利点では、男女とも生き方や行動の自由が一番高い。一方結婚の利点では、「精神的な安らぎの場が得られる」「自分の子どもや家族がもてる」が高い。これらをみる限り、結婚に、安らぎの場としての家族のイメージと、生き方や行動の自由が制約されるイメージのどちらが強いかにより、結婚意欲や結婚行動が左右されるのではないかと推測できる。

女性の社会進出や家事の省力化が進み、結婚の必要性は低下した。それに加え結婚や子どもについての社会的圧力が弱まった結果、それらは人生の選択肢となり、結婚子育てをしたいか・したくないか、で選択されるものになっている。この場合の結婚や子育ては、望む状態に近づこうとし、望まない状態からは遠ざかろうとする、接近回避動機によって説明できるのではないだろうか。

これまで、利得と損失の観点から結婚・子育てイメージを捉えるための尺度はみられない。そこで本研究では、利得と損失の観点から結婚・子育てイメージを捉える尺度を作成する。このことは、未婚者の結婚や子育てに対する認識を定量的に測定し、家族形成の動機づけや、文化変動との関連を分析するためのデータを提供できるという点で意義がある。

1.2. 制御焦点理論と接近回避志向

Higgins (1997) は制御焦点理論を提唱し、個人が目標を追求する際の動機づけのスタイルを「促進焦点」と「予防焦点」の2つに分類した。促進焦点は、ポジティブな結果の有無に注目し、成功や成長を重視する一方、予防焦点は、損失や失敗などのネガティブな結果の有無に注目し、損失や失敗のない安全や安心を求めるというものである。接近回避志向は、これらの制御焦点に基づく行動傾向で、接近志向は利得を求める傾向を示し、回避志向は損失を避ける傾向を示す。尾崎・唐沢 (2011) は、特性的な制御焦点の傾向を測定するために、Promotion/ Prevention Focus Scale (PPFS) 邦訳版を作成し、自己評価が肯定的である場合には利得接近志向が強く、否定的である場合には損

失回避傾向が強くなることを示した。これらの志向性の違いは対人関係にも関わり、促進焦点の個人は、親密な関係性における幸福や楽しさに注目するのに対し、予防焦点の個人は、平穏や安心を得るための義務や責任に注目する (Molden & Winterheld, 2013)。

結婚子育てのイメージは、自分の成長や求めるものの獲得につながる望ましい状態のイメージもあれば、自分にとって価値あるものの喪失や安全を脅かす望ましくない状態のイメージもあろう。前者のイメージは個人にとって利得イメージであるのに対し、後者のイメージは損失イメージとなる。結婚にはこの両方のイメージがあるものの、どちらにより注目するかの違いが、結婚や子どもに接近するか回避するかの動機づけを左右するのではないだろうか。

恋愛結婚が主流の今日、結婚するには、出会いから結婚までのプロセスに多大な時間や経済やエネルギーという有限の個人的資源を投入して、結婚のための行動を行う必要がある。結婚子育てのイメージが望ましいものであるほど、結婚に接近したいと思い、より多くの時間や経済やエネルギーなど個人的資源を結婚行動に投入するために、結婚し家族を形成する確率が高まると考えられる。

このように、未婚者における未婚理由は経済的理由以上に心理的理由が重要であり、結婚に対する意思決定には複数の要因が影響を及ぼすと考えられる (伊東, 1997)。しかし若者の結婚子どもに対する利得や損失イメージを評価するための心理尺度は見られない。そこで本研究では、結婚の利得イメージと損失イメージについての尺度の検討を行う。

1.3. 結婚や家族形成に関する尺度

日本の結婚観尺度の研究では、小田切 (2003)、竹原 (2006) の結婚観尺度がある。小田切 (2003) は、離婚に対する意識との関連を見るために結婚への期待、結婚生活に対する拘束感、伝統的結婚観の3因子からなる結婚観尺度を作成している。竹原 (2006) は、子どもがもたらす豊かさ、結婚への興味、温かい家庭、犠牲・負担感、結婚生活の充実、自立感の6因子を抽出し、犠牲・負担感以

外の因子と結婚意欲との関連が見られたと報告している。しかしいずれの尺度も、項目内容に、結婚や子どもについてのイメージと、結婚意欲の反映としての行動、結婚意欲そのものが混在しており、結婚意欲を左右する要因としての結婚イメージを測定するには不都合がある。平山・柏木（2004）は、中年期夫婦を対象に、相思相愛、理解・支持、妻の献身・夫の甲斐性といった夫婦の関係性についての結婚観を作成しているが、既婚者における結婚観であり、これも未婚者の結婚意欲を測定するには不都合であった。

永久（2023）は、結婚イメージ尺度を作成し、幸せな生活をイメージするか、自由の制約される生活をイメージするかが結婚意欲と関連することを報告している。しかしこの尺度には子どもに関する項目は含まれておらず、結婚の主な目的が子どもを持てること（第16回出生動向基本調査）である日本の現状を十分には反映しない。そこで本研究では、永久の結婚イメージ尺度に子育てに関する項目を追加した上で、結婚への期待や態度を測定する尺度である The Marital Scales（Park and Rosen, 2013）の中の一般的結婚観との関連の検討を行う。

The Marital Scales（Park and Rosen, 2013）は、いずれは結婚したいなどの結婚意思3項目、一般的結婚観10項目（結婚する事は重要であるなどの積極的態度、結婚は人を不幸にするなどの否定的態度、結婚には疑問があるなどの恐れや懷疑）、結婚の諸側面の価値23項目（愛情、尊敬、信頼、経済、意味、性的親密さ）の3尺度から成る。特に、小田切（2003）、竹原（2006）など日本の結婚観尺度には含まれない、親密な関係性についての項目や一般的結婚観など、網羅的な項目で構成されている。その一方、日本の未婚者における主要な未婚理由である、自由な時間、生き方の制約や性別分業イメージを測定する項目群が含まれていない。また質問総数が多いことに加え類似の質問項目が多いため、複数の要因の検討が必要になる日本の未婚化・晩婚化研究においては実用性が十分とは言えない。

1.4. 本研究の目的

以上より本研究では、結婚や子育てへの接近回避を動機づけるイメージを検討するため、子ども子育てについてのイメージを含めた結婚子育てイメージ尺度を作成し、一般的結婚観（Park and Rosen, 2013）との関連から妥当性の検討を行う。次に、未婚者と既婚者の結婚イメージの比較を行い、同じ年齢段階において結婚した群としない群の間で結婚イメージを比較し、未婚群の方が悲観的なのではないかという仮説の検討を行う。

2. 方法

調査は2022年12月に、調査会社に委託して、インターネット調査により行われた。調査対象は調査会社に登録する全国のサンプルから、大都市圏と非大都市圏との割合が同じになるよう割り当て、年収200万円以上の25歳から39歳の既婚・未婚の男女960名を対象とした。男女の内訳は同数であり、このうち半数が未婚者である。既婚者には未婚時点での回答を求め、既婚者と未婚者を込みにした960名で分析を行った。調査内容は、以下のとおりである。

結婚子育てイメージ尺度：永久（2023）が作成した結婚イメージ尺度項目に、子どもや子育てに関する項目を追加して20項目を作成した。1 全く当てはまらない から 7 よく当てはまる までの7件法で尋ねた。

一般的結婚観尺度：The Marital Scales（Park and Rosen, 2013）の一部である。この尺度群は複数の尺度から構成されるが、結婚子育てイメージ尺度の妥当性の検討という本研究の目的から、一般的結婚観10項目のみを用いた。この項目は、結婚すると幸せになれる、結婚にはメリットがある、結婚はいい仕組みだと思う、結婚することは重要だという積極的結婚観と、既婚者の多くが幸せではない状況だと思う、結婚すると幸せではなくなる、結婚に疑問を感じる、結婚生活のことを考えると不安になる、結婚生活のことを考えると心配なことがある、結婚などしない方がいい という消極的結婚観の項目から成る。それぞれ1 そう思わない から 5 そう思うの5件法で尋ねた。これら

のほか、フェイスシートと本研究では扱わなかった質問内容が含まれる。結婚子育てイメージ尺度と一般的結婚観尺度は、未婚者には現在の評価を、既婚者においては未婚時点での評価を求めた。

倫理的配慮として、所属する大学の倫理審査委員会の承認（2019-008）を得た。また、web調査に際しては、最初に調査目的と調査内容、インフォームドコンセントを載せ、それに同意した者のみが先に進み回答するように設計した。

3. 結 果

3.1. 結婚子育てイメージ尺度項目の因子分析と平均値

子どもに関する項目を追加した結婚子育てイメージ尺度項目の因子構造を確認するため因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った。スクリープロットと本研究の目的を踏まえ、固有値2.0以上の2因子を指定し、同様の分析を再度行った。‘重要なことは夫が決めるようになると思う’‘結局、家事や子育ては主に妻が担うのだろうと思

う’‘家計費は夫がほとんど稼ぐのだろうと思う’の3項目は、いずれの因子にも負荷が低いため除外して、再度同様の分析を繰り返し、2因子を得た（Table 1）。第1因子は、結婚による自由の制約や大変さに関するイメージであり、高い負荷が見られたのは‘結婚すると、お金を自由に使えなくなる’‘やりたいことがあっても自由に行動できなくなりそう’‘結婚生活は我慢が多いだろう’など、結婚による自由の制約や大変さをイメージする内容であったため、「自由の制約と大変さ」と命名した。第2因子は、‘結婚すると人生が豊かになると思う’‘結婚生活の中で自分が成長する’‘心からくつろげる場所ができる’など、幸せや自分の成長などを中心とする心理的な利得に関する項目内容であった。そのため「幸せな結婚生活」と命名した。 α 係数は.89, .76で十分な値であった。永久（2023）で性別分業の因子に負荷が高かった3項目はこれら2因子には負荷が低いため除外されたが、‘子どもが小さいうちは、母親がそばにいることになると思う’は、「自由の制約大変さ」に.46の負荷がみられた。

Table 1 結婚子育てイメージ項目の因子分析結果

結婚子育てイメージ項目	F1	F2
自由の制約と大変さ ($\alpha = .89$)		
Q6-11 結婚生活は我慢することが多いだろうと思う	.750	-.199
Q6-3 やりたいことがあっても、自由に行動できなくなりそうな気がする	.745	-.060
Q6-10 結婚するとお金を自由に使えなくなると思う	.722	-.016
Q6-6 結婚生活はいろいろ面倒なことが多そうだ	.722	-.235
Q6-9 休日でも自由に過ごせなくなると思う	.684	-.175
Q6-5 子どものことが最優先で自分のことは後回しになるのだろうと思う	.670	.261
Q6-18 家事や子育ては大変そうだ	.660	.187
Q6-20 家族への責任が重そうだ	.643	.175
Q6-8 親や親戚との関係に気を使いそうだ	.612	.012
Q6-16 独身の時と同じようには仕事ができなくなると思う	.474	-.014
Q6-2 子どもが小さいうちは、母親がそばにいないようになると思う	.458	.174
幸せな生活 ($\alpha = .76$)		
Q6-17 結婚すると人生が豊かになると思う	.008	.781
Q6-4 結婚生活はいろいろと楽しいことが多そうだ.	-.101	.779
Q6-15 心からくつろげる場所ができると思う	-.081	.767
Q6-19 結婚生活の中で自分が成長する	.195	.744
Q6-12 困った時に頼れる相手ができる	.155	.722
Q6-13 子育ては楽しそうだ	-.033	.589
因子間相関	-.129	

3.2. 結婚子育てイメージ尺度と一般的結婚観の関連

結婚子育てイメージ尺度の妥当性を検討するために、一般的結婚観 (Park and Rosen, 2013) 項目との相関分析を行った。「幸せな生活」イメージは、結婚すると幸せになれる、結婚にはメリットがある、結婚はいい仕組みだと思う、結婚することは重要だ、という、積極的結婚観とそれぞれ中程度の正相関が見られた。一方、既婚者の多くは幸せではない状況だ、結婚すると幸せではなくなる、結婚に疑問を感じる、結婚生活のことを考えると不安になる、結婚生活を考えて心配になる、結婚などしない方がいい、という消極的結婚観とは弱い～中程度

の負の相関関係が見られた。とりわけ、結婚などしない方がいい、とは中程度の負相関が見られた。

逆に「自由の制約と大変さ」イメージは、結婚すると幸せになれる、結婚はいい仕組みだと思う、結婚することは重要だという積極的結婚観とは弱い負の相関関係にあり、既婚者の多くが幸せではない、結婚すると幸せでなくなる、結婚に疑問を感じる、結婚生活を考えて不安になる、結婚生活を考えて心配なことがある、結婚などしない方がいいという消極的結婚観とはそれぞれ弱い～中程度の正相関関係が見られた。とりわけ、結婚生活のことを考えると不安になる、心配なことがあるとの関連が強かった。

Table 2 結婚子育てイメージ尺度と一般的結婚観の関連

一般的結婚観	M	SD	全体		未婚者		既婚者 (未婚時点)	
			幸せな生活	自由の制約	幸せな生活	自由の制約	幸せな生活	自由の制約
幸せな生活	4.64	1.11	1		1	-0.054	1	
自由の制約	5.31	1.08	-.083**	1	-0.054	1	.045	1
結婚すると幸せになれる	3.31	1.03	.650***	-.210***	.650***	-.191***	.573***	-.096*
結婚にはメリットがある	3.69	0.91	.586***	.003	.497***	.073	.613***	0.056
結婚はいい仕組みだと思う	3.18	0.90	.466***	-.200***	.436***	-.258**	.429***	-0.052
結婚することは重要だ	2.96	1.08	.402***	-.173***	.442***	-.256***	.309***	-0.011
既婚者の多くが幸せではない状況だと思う	3.03	0.89	-.239***	.273***	-.153***	.289***	-.222***	.173***
結婚すると幸せではなくなる	2.47	0.93	-.469***	.207***	-.359***	.136***	-.465***	.149**
結婚に疑問を感じる	2.72	1.10	-.457***	.250***	-.405***	.266***	-.386***	.097*
結婚生活のことを考えると不安になる	3.05	1.16	-.291***	.410***	-.103*	.402***	-.277***	.303***
結婚生活を考えて心配なことがある	3.26	1.10	-.230***	.426***	-.043	.452***	-.233***	.316***
結婚などしない方がいい	2.45	1.12	-.558***	.228***	-.520***	.235***	-.504***	.088

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

3.3. 結婚子育てイメージ尺度の未婚者と既婚者の違い

未婚者と、既婚者の未婚時点における結婚子育てイメージを比較した。平均値を未婚既婚間で比べると、未婚者は幸せな生活イメージより自由の制約と大変さイメージの方が有意に高く ($M(SD) =$ 幸せな生活 4.29 (1.07), 自由の制約 5.57 (1.10), $t(479) = -17.81$, $p < .001$, Cohen's $d = 1.57$), 既婚者では両イメージ間に有意差はなかった ($M(SD) =$ 幸せな生活 4.99 (1.04), 自由の制約 5.05 (0.99) $t(479) = -.95$, $n.s.$, Cohen's $d = 1.41$) (Figure 1)。

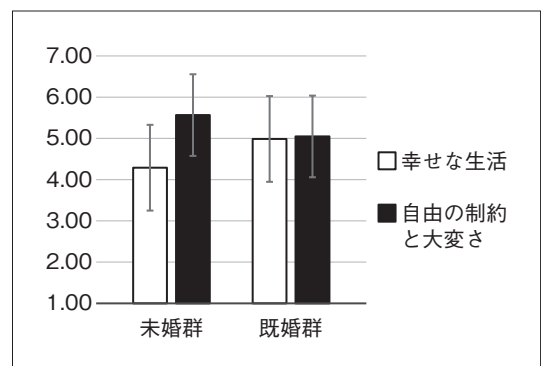


Figure 1 未婚群と既婚群における結婚子育てイメージ尺度

4. 考 察

本研究では、子育てに関する項目を追加した結婚子育てイメージ尺度を作成し、一般的結婚観との関連の検討から妥当性の検討を行った。そして、未婚者は未婚時点の既婚者に比べ、結婚の利得イメージが低く損失イメージが高いのではないかという仮説の検討を行った。

結婚子育てイメージ尺度項目（永久, 2023）に子どもに関する項目を追加して因子分析を行った結果、前研究と同様の2因子が抽出され、「自由の制約大変さ」イメージと「幸せな生活」イメージと命名した。前研究では、性別分業を入れた3因子であったが、これは本研究の目的である、利得イメージと損失イメージの観点からは意味合いが曖昧であり、また項目数が2項目と少ないことから、除外して分析を行なった。2因子間の因子間相関は弱い負の値でほぼ独立であった。子育てに関する項目は、子どものことが最優先で自分のことは後回しになるだろう、結婚や子育ては大変そう、子どもが小さいうちは母親がそばにいるようになる、がいずれも「自由の制約大変さ」に分類されたのに対し、子育ては楽しそうだ は「幸せな生活」に正の負荷を示した。つまり、結婚子育てのイメージは、幸せな生活という利得イメージと、自由が制約されるし大変そうだという損失イメージが独立であることが示された。

結婚子育てイメージと一般的結婚観の相関は、全体として見ると、ほぼ全ての項目と予測通りの相関が見られた。すなわち、「幸せな生活」イメージは積極的な結婚観と中程度の正相関、消極的結婚観とは中程度の負の相関関係にあり、「自由の制約大変さ」イメージは積極的結婚観とは弱い負相関、消極的結婚観とは中程度の正相関の関係が見られた。

未婚者と未婚時点の既婚者が持つイメージの違いは、「自由の制約大変さ」イメージと一般的結婚観の相関の様相である。未婚者は、「自由の制約大変さ」イメージが強いほど積極的結婚観が低く、消極的結婚観が高くなり、「結婚などしない方がいい」も高くなる。しかし既婚者は「自由の制約大変さ」イメージが高くても積極的結婚観が低下せ

ず、消極的結婚観との関連も未婚者よりも小さい。そして「結婚などしない方がいい」との相関はみられなかった。このことから未婚群は、結婚子育てによって自由が制約されるのならば、それは幸せな生活ではないし自分にとってメリットはない、と考えているために現在未婚であると解釈できる。一方既婚群は、結婚子育てで自由が制約されたとしても、それは結婚の幸せやメリットを損なうものではない、と未婚時点で考えていたために、結婚したと解釈できる。

結婚子育てイメージを未婚群と既婚群で比較した結果、既婚群は未婚時点で、幸せな生活イメージと自由の制約大変さイメージがほぼ同程度であったのに対して、未婚群は幸せな生活イメージが既婚群よりも有意に低いことに加え、幸せな生活イメージよりも自由の制約イメージの方が有意に高いことが明らかになった。このことは未婚群が、結婚意欲があるにも関わらず外的阻害要因で結婚できないのではなく、そもそも結婚子育ての利得イメージが低く損失イメージが高いために結婚意欲が低く、結婚のための行動に消極的であったために、未婚であることをうかがわせる。未婚群の「幸せな生活」イメージは、結婚すると幸せになれる、結婚にはメリットがあるなどの一般的結婚観と関連があり、「自由の制約大変さ」イメージは、結婚のことを考えると不安になる、心配なことがあるなどの一般的結婚観と関連していた。つまり未婚群は、結婚のことを考えると、幸せになれる、メリットがある、と思う以上に、不安や心配を感じるために、結婚意欲が低く結婚のための行動の動機づけが低いために、未婚でいると解釈できるのではないだろうか。

5. まとめと今後の課題

以上の結果から、結婚子育てイメージ尺度には一定の信頼性と妥当性があると考えられる。また、少なくとも年収200万円以上の未婚者においては、結婚子育てで幸せになれるというイメージよりも、結婚子育てで自由が制約されて大変な生活になりそうだというイメージから、結婚意欲そのものが低いために未婚でいることが推測される。つまり、

結婚子どもが個人の人生の選択肢となった今日では、結婚子育ての利得イメージに注目するか損失イメージに注目するかを左右する個人の制御焦点が、結婚子どもという家族形成に関わるのではないかと考えらえる。

本研究の結果は、今日の少子化と関連する未婚化が、結婚による幸せな生活という利得イメージの低さと、自由の制約や大変さという損失イメージの高さと関連することを示した。家事が省力化され、女性も経済的に自立した今日では、結婚の道具的メリットは薄れている。その一方で、結婚後の生活では未だに性別分業が期待されており、それは自由の制約や大変さのイメージにつながる。さらに、両親間の葛藤や離婚が、若者の結婚への期待に影響を及ぼすことが報告されている（山内・伊藤，2008）ように、今日の若者の周囲の結婚生活は必ずしも幸せな生活のロールモデルばかりではない。

今日の若者の多くは、「いずれは結婚したい」としており（第16回出生動向基本調査）、結婚を否定しているわけではない。しかし、学校教育など公的領域におけるジェンダー平等や女性の社会進出などの社会文化的、経済的文脈が変化している一方で、結婚子どもが生まれると、今も母親が子育ての責任者となり、性別分業になってゆく家庭生活に大きな変化はみられない。このギャップが、結婚子育てに幸せな生活イメージが持てず、自由の制約大変さイメージが強くなる要因なのではないだろうか。

少子化支援では経済的支援に注力されがちであるが、結婚や子どもが個人の人生の選択肢となった今日、子育てに関するジェンダー平等の教育や価値観の浸透など、結婚による自由の制約大変さイメージを低減するための心理的・文化的要因についての検討が重要であると思われる。

5. 利益相反について

なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

謝 辞

本研究は科研費18k03045（代表永久ひさ子）の助成で行われた。

引用文献

- 天野 馨南子 (2023). 【少子化社会データ詳説】日本の人口減を正しく読み解くー合計特殊出生率への誤解が招く、とまらぬ少子化. ニッセイ基礎研究所 Retrieved October 27, 2024, from <https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=75505?site=nli>
- Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, 52, 1280-1300.
- 平山順子・柏木恵子 (2004). 中年期夫婦のコミュニケーション・パターン：夫婦の経済生活 及び結婚観との関連 発達心理学研究15(1), 89-100.
- 伊東秀章 (1997). 未婚化に影響する心理学的諸要因：計画行動理論を用いて. 社会心理学研究, 12(3), 163-171.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2022). 第16回出生動向基本調査 独身者調査. Retrieved September 22, 2024, from https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou16/doukou16_gaiyo.asp
- Molden, D.C., & Winterheld, H.A. (2013). Motivation for promotion or prevention in close relationships. In J.A. Simpson & L. Campbell (Eds.), *The Oxford handbook of close relationships* (pp.321-347). New York, NY: Oxford University Press.
- 永久ひさ子 (2023). 未婚者における結婚イメージ尺度作成の試み. 文京学院大学人間学部研究紀要, 24, 125-134.
- 小田切紀子 (2003). 離婚に対する否定的意識の形成過程：大学生を対象として. 発達心理学研究14(3), 245-256.
- 尾崎由佳・唐沢かおり (2011). 自己に対する評価と接近回避志向の関係性—制御焦点理論に基づく検討—. 心理学研究, 82(5), 450-458.
- Park, S.S., & Rosen, L.A. (2013). The marital scales: Measurement of intent, attitudes, and aspects regarding marital relationships, *Journal of Divorce & Remarriage*, 54, 295-312.
- 竹原健二・三砂ちづる (2006). 「結婚観尺度」の作成. 民族衛生, 72(6), 225-233. <https://doi.org/10.1137/jstn.72.225>

org/10.3861/jshhe.72.225

山内星子・伊藤大幸（2008）．両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響：青年自身の恋愛関係を媒介変数として．発達心理学研究, 19(3), 294-304.

（2024.9.25受稿，2024.11.5受理）